

(1) 津教会のはじまり

(洗禮簿第1号)

明治初期の津市天主教會洗禮簿に、第1号として「伯多禄天花寺延春 年齢40年洗禮1877年」(明治10年)との記録があり、この年を津教会の創立の年と定め、教会創立100周年、125周年を祝ってきた。洗禮簿には、天花寺氏のことを、「住處当時東京」とのみ記述され、代親名も授洗司祭名も書かれていない。「当時東京」とはどういうことを示すのか、例えば、津出身の人が東京で受洗されて津に戻ってこられ、洗禮簿に記録されることになったのか、津でどなたかによって洗禮を受け、洗禮台帳作成当時東京におられたのか詳細は不明である。いずれにせよ、津(三重)地方の宣教に最初に訪れたビリオン神父伝には記録がない。又、天花寺氏は津の墓地には埋葬されていない。

(ビリオン神父の伊勢への布教伝道) ※ 中央出版社発行の「現代日本カトリックの柱石ビリオン神父」によれば

第1回 「明治13年(1880年)7月、ビリオン神父は、ロレンソ好松(西田)に連れられて伊勢(三重)に旅行することにした。神父は数か月前から伊勢の人と知り合いになって、是非伊勢に話に来て下さいと招待されていた。・・・津では5、6軒の宿舎からことわられたあげく、警察に頼んで、やっとのこと1軒の宿舎をさがしてもらった。」(p210~211)

「神父のはじめての津での宣教の様子」(p211~212)

「それから神父は津を出発して、松阪市へ向かった。」松阪での宣教の様子 (p211~212)

「神父はこの地に伝道士を1人おくことに決心した。神父はとりあえず好松を残して、1人で京都に帰った」(p213)

第2回 明治14年(1881年)夏、再び訪問、駒田倭文氏に会う。

第3回 明治15年(1882年)夏、宣教巡回。ペテロ駒田倭文(36才)息子ルトヴィコ篤雄(9才)、津市の駒田氏の自宅で受洗。他2~3名も受洗。

第4回 明治16年(1883年)はじめ、(駒田氏の妻 明治16年1月15日受洗)弁護士駒田倭文の宣教、ビリオン神父磯村貞俊と出会う。「弁護士駒田氏は、堂々とキリスト教の偉大さを説いた」(p236)「その時神父は磯村貞俊という36才になる青年に出会った。」

・彼の真剣で鋭い神父への質問 (p236)

・彼が兄を殺したことの経緯 (p237)

・彼が自殺しようとしたこと (p239)

「磯村のことは神父の頭にこびりついてはなれなかった」(p239)

第5回 「明治16年(1883年)夏、神父は津、松阪、亀山の方面にわらじ履きで出かけた」(p244)

・「磯村氏、明治16年9月4日、(ビリオン神父から授洗され、霊名をパウロと称した。・・・このは磯村のほかにも4、5人が受洗した。」(p244~245)

・磯村貞俊氏自筆の略歴 (p245~246)

・「明治16年(1883年)の終りのころ・・・津でもめでたいことがあった。熱心な青年司祭ローゼ師が津で布教することになったからである。・・・しかし、悲しいことに、ローゼ師はあまりの熱心に健康を害し、数か月後に咯血しそのまま帰らぬ人になった。」(p253~254)

(ビリオン神父明治17年以降の宣教)

明治17年(1884年)、ビリオン神父は中野伝道士や磯村氏らと共に、布教伝道の計画を立て、まず京都・大津、伏見にも旅行して福音の種を蒔いた。」(p254、255)

——以降、近畿及び中国地方の伝道のはじまり (p255~)

- ・磯村氏らのこと（p259～260、p444～446 など）
- ・近畿及び中国地方の伝導士磯村貞俊氏の写真（表紙につづく写真）

初代大阪教区の伝道者たち（1990年クリスマス、倉敷カトリック教会ヨハネ・スクルース著）

- ・伝道者 ロレンチオ西田芳松（ビリオン神父伝ではロレンソ好松）
- ・伝道者 パウロ磯村貞俊（弁護士駒田倭文氏のことは、上記伝道者のなかにも記述あり）

（参考）（1）三重の布教史（1）バーリ神父 ヴィリオン神父の津松阪訪問

※年数に少し誤りあり、ビリオン神父伝を基本とされたい。

（2）三重の布教史（2）バーリ神父 明治29年～昭和11年

（津の星1963年 第61号、11月 第62号）

※ 明治31年ピロース神父、新しく大きな屋敷にうつり、聖堂祝別さる。

（ビリオン神父伝には、明治28年頃とある）